

山桜の里 戸赤

廃利用が
テレビで
放映される

補助事業に採択されたパンフレット作成

滞在型体験交流の 村づくりに一役



10月13日放映された福島中央テレビ番組取材時(木土工房)

戸赤の観光パンフレットを作り、体験観光集落をPRし地域の活性化につなげようとする計画が今年度の補助事業に採択されました。県が選ぶ広告関係の事業者が、まとめ役となり、戸赤の住人・下郷町観光協会・会津鉄道(株)・着地型ツ

リズム推進事業実行委員会が構成員となり共同作業方式で情報発信のPR紙を作ることになりました。

事業計画は次の五要点です。①「やまざくら祭り」や宿泊施設「やまざくら」の運営をもっと充実させる。②「川遊び」の付加価値を高め、川をテーマとした体験の更なる展開を図る。③木工ろくろ体験、炭焼き施設の活用、豊富な



「ゴジてれChu!」で廃校利用のやまざくら学校が紹介

この事業の効果はホームページ、フェスブック、ツイッターなどの情報発信、首都圏などでのPR活動、来年春から体験モニター募集などです。

雪囲いと収穫祭 十一月十五日/集会所

山菜資源、緑深い山をつなげた体験を活用。④特産品花豆を使ったお土産「花豆パイ」を継続発展させる条件整備。⑤これらを含むした体験型むらづくりのパンフレットを作る。」

【木地の学習No.60】ところが、カンナボウ用のハガネはよく鍛えたやわらかいものではなく、ある程度炭素を含んだかたいハガネが適していた。それは回転している木地にカンナを当てて削っていくために高熱を発生し、この熱で刃物にヤキが入ってしまい、切れ味がわるくなるからだという。やわらかいハガネはその時点で、もう一度焼き直さないと使えない。しかし炭素を含んだかたいハガネは長い間カンナを当てているとヤキが入って甘くなるが、カンナを木地ガタから離し、熱がさめるとまた固くなるという性質を持っている。大変都合がいいことに手引きロクロは一回ごとに回転が変わる。綱の挽き手が右手で強く引いたときにカンナを当て、左手でもどすときはカンナは離す。この間にカンナの刃先の熱がさめてかたくなり、次の回転のとき木地ガタにカンナを当てても、切れ味が悪くならない。刃先が甘くなると茶色のハガネが青みがかった色に変わるのですぐわかったという。木地屋がイズハガネのカンナを使っていたのは明治時代までのようで、大正時代のはじめごろには、トウゴウハガネ(西洋ハガネの一種)というかたいハガネが広まっていた。この段階から木地屋が総ハガネの棒を金物屋から購入し、1〜2センチの長さで切ってうすく延ばし、カンナボウにつけて刃として使用した。カンナに関しては、鍛冶屋の手をわずらわせなくとも済むようになった。(会津地方歴史民俗資料館「木地語り」より) (つづく)

そばの脱穀

ちょっと
いっぴく
【6.26花植作業のとき】



種まき、草刈り、刈り取り、脱穀と(千葉から)足を運び、全部自分たちでこだわりをもってそばを楽しんでいる佐藤さん一行



星サツキさん(渡部利男さんが撮ってくれました。次号に続く)



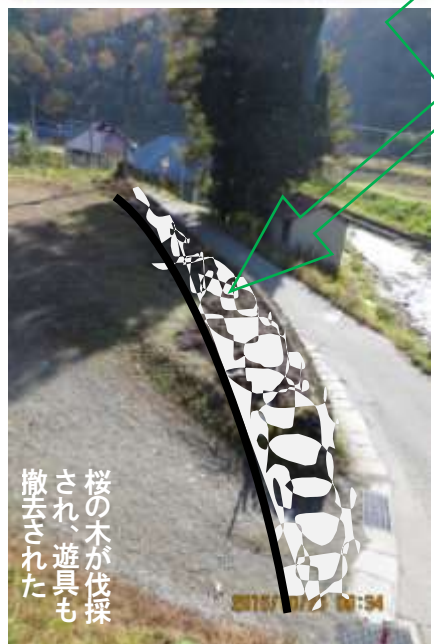
豆花

栽培

「秋空が良く実入りが持ち直したため乾燥が遅くなったけど。今年も花豆ハイの原料が間に合うほど集まるといいのだが。」談

このあたりまで道路の用地に広がる見込み

れきのひとコマ



桜の木が伐採され、遊具も撤去された



着手前



川が変わる

(ストーリー性のある村づくりのために[No.28]・下郷町史 石斧(セキフ) 磨製のものや打製のものがあり、磨製のは樹木の伐採や木製品の加工に用いられた。磨製石斧には小型で美しい石で作られ、中には吊下げるためと思われる穴のあるものもあり、実用とするには疑問なものも少なくない。小型の磨製石斧は本町湯野上遺跡の採集品(二瓶清採集)があり、田島の会下(れんげ)・上ノ台遺跡からも出土している。伊南では堂平遺跡の第二次調査で二点出土しており、そのうち一点にはススかアスファルト様の黒色物が付着している。また三次調査で出土した小型の磨製石斧には擦切手法で製作した痕跡があり、貴重な石材の有効利用と能率化が図られている。こうした例は田島の会下遺跡や上ノ台遺跡の出土品でも確認されている。打製石斧には分銅型・短冊型・西洋梨型などがあり、クズやカタクリ・ワラビ・ユリ・ウバユリなどの地下茎を掘るための石鍬と考えられている。島田形の打製石斧は家ノ下遺跡より出土している。石錐(せきすい) 土器の修理用の穴や樹皮・皮などに穴をあけるための道具であり、つまみのあるものと無いものがあるが、無いものは石鍬との区別が困難である。栗林・五百地両遺跡などから出土している。

「下郷町史-第7巻通史編(発行・下郷町)」より出典(続く)